

ストーリーテリングにおける 語り手の自己表出と 語彙・文法表現の使用

—会話物語「サンタクロースの衣装を買った」の分析

唐津麻理子

◆要旨

目 常会話のストーリーテリングの中で参加者が用いる特定の語彙や文法表現が、語り手の「普通さ」(Sacks 1992)という自己の表出にどのように関わるかを「ポジショニング・アプローチ」(Bamberg 2006)を用いて分析する。聞き手が「動詞テ形+しまう(ちゃう)」、反復、音声特徴などにより意外さを示したのに対して、語り手は家族のカテゴリーに属する語彙や「動詞テ形+もらう」を用いて、物語を文脈化し他の登場人物との関係の中に自分を位置付けることによって普通さを表している。登場人物の立場を位置付けたり評価態度を示す語彙や文法表現が、語り手の自己表出を考察するための重要な手がかりとなりうることを提示する。

◆キーワード

会話ストーリーテリング、自己表出、ポジショニング・アプローチ、普通さ、文脈化

◆ABSTRACT

Applying the "positioning approach" (Bamberg 2006), I investigate how the conversational participants' uses of vocabulary and grammatical expressions relate to the teller's presentation of self, specifically the presentation of her "ordinariness" (Sacks 1992). I demonstrate how the recipient displays her surprise by using the form [V-te + simau (tyau)], repeating the teller's phrase and her voice quality, and how the teller presents her ordinariness in response to the recipient, contextualizing her story and positioning herself in relation to other story characters by using a family term and the form [V-te + morau]. This study shows how examining vocabulary and grammatical expressions which index the speaker's position and her evaluative stance is important for the analysis of the teller's self.

◆KEY WORDS

conversational storytelling, presentation of self, positioning approach, ordinariness, contextualization

The Story Teller's Presentation of Self and the Uses of Vocabulary and Grammatical Expressions in the Storytelling "I bought a Santa Claus costume"

MARIKO KARATSU

1 はじめに

本稿では、日常会話において行われたストーリーテリングの過程で参加者の用いる特定の語彙や文法がどのように物語の語り手の自己の表出に関わるかに注目し、語り手の自己の表出を分析する。自己の表出は、会話中で物語を語るにより達成される事柄の1つであり (Becker & Quasthoff 2004)、近年の英語会話を中心としたストーリーテリングの研究で注目されている分野の1つである (Bamberg, De Fina & Schiffrin 2007)。ストーリーテリングを通じた参加者のアイデンティティの表出を研究する研究者たちは、「ポジショニング ‘positioning’」^[註1]という概念を用い、物語が始まる以前の参加者たちのインターアクション及び、物語の語り手が物語の登場人物との関係性の中で自分をどのように位置づけているかを分析することにより、語り手が表出している自己が分かるとしている (Davies & Harre 1990; Bamberg 1997, 2004, 2006; Wortham 2000; Bamberg & Georgakopoulou 2008)。本稿では、Bamberg (1997, 2004, 2006)、Bamberg & Georgakopoulou (2008) が提唱する「ポジショニング・アプローチ」を用い、(1) 物語が始まる前の参加者たちのインターアクションと語り手の物語の語り方を分析し、(2) 物語を語ることによって語り手がどのような自己を表出しようとしているのか、また(3) 語り手と他の参加者が用いる特定の語彙や文法表現が語り手の自己表出にどのように関与しているかを考察する。

会話ストーリーテリングの研究においては、物語を語るためのターンやフロアの取り方に関連して、物語の語り手がどのような手段を使って物語を語り始め、語り終わるか、また、ストーリーテリングがどのように会話の参加者たちの協働作業によって作り上げられるかが研究されてきた。また、会話中で物語が話されることにより達成される事柄に注目した研究では、物語を話すことにより、語り手が他の参加者との衝突を和らげる、ある行為に対する責任回避を行う、他者に同調することを表すなど、参加者間の人間関係や社会的関係を調整することができることが示されている。自己の表出は、物語を語るにより行われる大切なことの1つであるが、日本語会話を対象とした研究では、ストーリーテリングの過程を通しての自己表出の研究は始まったばかりだ

と言えよう (Karatsu 2004, Szatrowski 2010)。

本研究では、会話物語及び、ストーリーテリングを次のように定義して分析を行う。会話物語とは、少なくとも2つの時間的連鎖のある出来事や状況が語り手の何らかの観点から語られ、会話の参加者間のインターアクションを通して作られるものである (Karatsu 2010)。また、Jefferson (1978) を基に、ストーリーテリングとは、会話参加者のインターアクションからなる現在進行形のイベントであり、物語が始まる前に参加者たちが物語への指向を示し、参加者たちのインターアクションを通して組織的かつ連鎖的に会話の中に組み込まれるものであると定義する (Karatsu 2010)。ストーリーテリングは、物語が始まる前の会話、物語が語られている際の会話、物語の終了後に物語と何らかの関連性を持って語られる会話により構成されると考える。本稿で分析するストーリーテリングは、1人の参加者により語られる個人的な物語「サンタクロースの衣装を買った」と、この物語が開始されるきっかけになる会話を含んでいる^[註2]。

上記に示した(1)–(3)の考察から、物語「サンタクロースの衣装を買った」の語り手は、物語開始前に聞き手が示した(「衣装を買った」ことに対する)意外さに対応して物語を語っていることが分かる。更に、Sacks (1984, 1992) が示した「普通さ ‘ordinariness’」、「普通であることを行う ‘doing-being ordinary’」という考えを用いることにより、物語の語り手は聞き手が示した意外さに対して、普通さという自己を表出するために物語を語っていることが分かる。聞き手の意外さは、「動詞テ形+しまう (ちゃう)」という文法表現、反復といった言語行動、声の大きさや非言語行動により表されている。語り手は、物語の登場人物を特定の語彙(叔父さん、本人)で指し示し「動詞テ形+もらう」という形式を用いて、物語を「家族」という文脈に置くことによって自分を母親と位置づけて普通さを表出し、また自分を受身的な立場に置くことにより意外さへの責任を緩和して普通さを表出していることが分かる。本稿では、この様にストーリーテリングを通して参加者たちが用いる語彙や文法といった要素が、語り手の自己表出を考察するための重要な手がかりとなりうることを提示する。

2 先行研究

2.1 ポジショニング・アプローチ

ポジショニング・アプローチは、物語を語ることによる語り手の自己やアイデンティティの表出を分析する方法として、会話のナラティブを研究する社会言語学者や社会心理学者によって提唱されている (Davies & Harré 1990; Bamberg 1997, 2004, 2006; Wortham 2000; Bamberg & Georgakopoulou 2008)。従来のナラティブ研究における自己の表出の分析では、語り手の自伝的物語やインタビューにより抽出された物語が分析の対象として用いられ、その中で分析される自己やアイデンティティは、語り手の主観的な自己や語り手が自分のアイデンティティについて思い巡らせた結果語られたものであった (Karatsu 2004, Bamberg & Georgakopoulou 2008)。これに対して、ポジショニング・アプローチでは、物語が会話中に埋め込まれていること、物語の語られ方が語られる会話の状況に依存していること、物語が会話参加者の協働によって作られることなどインタラクティブに焦点を当てた物語分析により明らかになった会話ナラティブの「社会的行為/機能 ‘social actions/functions’」の側面に注目して参加者の自己が考察され (Bamberg & Georgakopoulou 2008: 278–279)、会話中で物語を語ることによって会話の参加者がどのように自己の感覚 ‘a sense of self’ を達成するのかを考察することが重要な課題となっている (Bamberg 2006)。Bamberg (2006: 144) は、話者は話をするにより「その話が何についてであるか (内容)」と「特定の社会的関係性を表す形式によって社会的インタラクティブ」を確立し、会話の起こっている時点での自分と出来事が起こった時点での自分を結びつけて自己を表出しているとしている。

ポジショニング・アプローチでは、会話とそこで話される物語の分析を3段階 (ポジショニング・レベル1、ポジショニング・レベル2、ポジショニング・レベル3) に分けて行う (Bamberg 1997, 2004, 2006; Bamberg & Georgakopoulou 2008)。レベル1では、物語の中で語り手が他の登場人物との関係の中で自分をどのように位置付けているかを分析する。特に、描写の仕方や物語の評価の仕方に焦点を当て、出来

事の起こる時間や空間が登場人物の社会的カテゴリーや行動とどのように関係するか考察する。レベル2では、物語が語られる前の会話のインタラクティブの過程の中で語り手がどのように自分を位置付けているか、または他の参加者が語り手をどのように位置付けているかを分析する。語り手が他の参加者にどのように理解されたいかが言語的及び非言語的手段により指し示されるため、レベル1、レベル2の分析ではこれらの手段に注目することが重要だとされる。レベル3では、レベル1とレベル2での分析結果を社会や文化の中に存在する規範的ディスコースに照らし合わせて考察し、それらの規範的ディスコースとの関係で物語の話者が自己やアイデンティティの感覚をどのように位置付けているかを解釈する。特に、規範的ディスコースに合わせようとする自己或いは反抗する自己が見て取れるとされる (Bamberg 2006: 145)。これらの3段階の分析をすることにより、現在進行形の会話と物語の時間・空間を超えて社会の中で語り手が指向する自己の位置付けが分かるという。

本研究では、ポジショニング・アプローチに従い、上記のレベル1～3の分析を行う。レベル3の考察では、次節で述べる Sacks (1984, 1992) が示した「普通さ」を用いて話者が表出する自己についての解釈を試みる。

2.2 普通さ ‘ordinariness’

Sacks (1992: 216–221) は、人々が指向する普通さについて、人々はあるがままの状態ですべて「普通 ‘ordinary’」であるのではなく、普通であるために普通の人であることを指向して物事を行っている、すなわち、「普通であることを行っている ‘doing being ordinary’」と述べている。さらに、人々が普通さを目指していることは、法外な経験や驚くべき経験のような普通から外れた経験を描写する時に顕著に現れるとしている。Sacksによれば、これらの経験は、その経験が同じような状況に置かれた人ならば誰でもが経験するようなあたかも当たり前の仕方によってもたらされた経験であるかのように描写される。つまり、普通から外れた経験は「非例外的な ‘unexceptional’」ものとして表される。Sacksにより示された「普通であることを行っている」ということは、ラジオインタビューの会話で売春婦が自分の職業を正当化する過程の分析 (Lawrence 1996) や会話ナラティブでの自己表出の研究 (Johnson & Paoletti 2004) によって、

会話の中で様々な手段により行われていることが報告されている^[註3]。

3 分析

3.1 ストーリーテリング「サンタクロースの衣装を買った」の概観

分析に用いる会話資料は、幸江 (S)、邦子 (K)、文恵 (F) という3人の30歳代の女性が、幸江の自宅のダイニングで話をしているところをビデオ録画 (約2時間) したものである^[註4]。分析の対象とするストーリーテリング (約1分15秒) は、幸江が話している物語「サンタクロースの衣装を買った」を中心としている。幸江は物語の中で、サンタクロースの衣装を買うに至った経緯を語っている。

会話 (1) は、物語「サンタクロースの衣装を買った」が話される前の会話である。2S-7Sで、幸江は、前日に家族 (幸江の母親、幸江の弟、幸江の夫、1歳に満たない幸江の子供) と開いたクリスマスパーティーで、サンタクロース役をした幸江の弟 (ケン) が、家族がいたダイニングに入ってきたが、通り道となった箇所が狭くて通れなかったという話をしている。邦子は、幸江の弟が巨体であることを知っており、「相変わらずサ (h) ンタさんてお (h) おきいわけねえ？」(9K) と笑いながら応答している。これに対し、幸江が11Sで「[hhh でほ] らなんか荷物も担いでるか [らさあ。]」と言って、弟がサンタクロースに扮していたことを暗示するやいなや、邦子は、「[え何] 何。」(12K)、「[え、なんか衣装] 着ちゃった [の?]」(14K) と言って、幸江の弟がサンタクロースの衣装を着ていたかどうかに興味を示している。幸江が「[衣しょ] う買って [ねえ (h) hhh]」(15S) と言った直後に、邦子が大きな声で「[買ったのー?]」(17K) と言って「衣装を買った」ことに驚きと興味を示している。幸江の物語「サンタクロースの衣装を買った」は、邦子の発話 (17K) の直後から始まる。

会話 (1) 物語「サンタクロースの衣装を買った」以前の会話

1K サンタさんがきちゃっ [たんだもんね?]

2S [昨日 (そう) サンタ] さんここできあ、

{2S: 「ここ」と言いながら右手の指で後ろを指す}

3F ああ。

4S メーリークリスマスとかつつてさ

{4S: 「メーリークリスマス」にメロディーをつけて発話する}

5S ここから入ってきてさあ、

6F (ん)

7S 机が (h) (.) せまくて (hh) ここ通 [れなか (ハハ)]

{7S: 上半身を後ろに反らせて両手で顔を覆いながら「ここ通れなか (ハハ)」と言う}

8F [アハハハハ] ハハハハハハハハハハ

[ハ . hh.hh.hh アハハハハハ .hh アハ]

9K [相変わらずサ (h) ンタさんてお (h) おきいわけねえ?]

10F [アハハハハ .hhハ]

11S [hhh でほ] らなんか荷物も担いでるか [らさあ。]

{11S: うなずいてから、両手を肩のほうに動かして荷物を担いでいるジェスチャーをする}

12K [え何] 何。

13F ハ [ハハハ ハハハ]

14K [え、なんか衣装] 着ちゃった [の?]

{14K: 姿勢を変えて上半身を少し後ろに反らす}

15S [衣しょ] う買って [ねえ (h) hhh]

{15S: 「ねえ」で左手で口を覆う}

16F [hh ハハハ]

17K [買ったのー?]

{17K: Sの方に上半身を乗り出す}

18F [ハ ハ ハハハ] ハハ

{18F: Sがうなづく}

会話 (1) に続く会話 (2) では、幸江が「ってゆうかー」という前置きが続いて物語「サンタクロースの衣装を買った」を話している (19S-56S)。物語の中で幸江は、弟が忙しくてパーティーに参加できないかもしれないと言った (21S) のに対して、子供 (正樹) のためにパーティーでドロッセルマイヤー役を

やってほしいという話をした (24S、25S、27S、28S) と語っている^[註5]。これに対し弟は、パーティーに来る交換条件として「衣装を用意する」こと (33S、35S、39S、40S、42S) を要求し、幸江は弟の要求を承諾した (46S) という旨のことを語り、最後に幸江の夫 (山田さん) が店に行き衣装を買ってきた (52S、53S、56S) と言って物語を終わらせている。

会話 (2) 物語「サンタクロースの衣装を買った」

19S (hh) ってゆうかー、ご飯食べに来なよって [言ったのねえ?]
 20K [うん。 うん。]
 21S そしたらーお仕事いそがしいから行けないかもしれない
 22S とかってゆう話をしててー、
 23K うん。
 24S hh でもー正樹君にとっては最初のクリスマスだから
 25S そうだケン君には (.) あのー叔父さんとしてー、
 26K [うん。]
 27S [なん] かド**ロッセルマイヤー**おじさんの役をやって
 28S もらわなくっちゃーって話 [をしたの。]
 29K [ん、ん、ふん。]
 30S >そしたらくなんか (.) 本人は
 31 (1.5) {幸江の子供が声を出す}
 32F あ [ごめんごめん。もう ()] {32F: 子供に話しかける}
 33S [あじゃあ、もーー**サンタ**のー] 衣装を [一用] 意しておいて
 34K [うん。]
 35S くれた [らー] 行くよとかってー。
 36K [うん。]
 37K うん。
 38S えーーじゃあ (.) 帽子かなんかー作っておくよーとかって
 39S 帽子じゃだめーとかって言ってー、
 40S (で) ちゃんとー [(.) あ] のー上も? [上下] のー?
 41K [うん 。] [うん。]

42S [赤い] のにーし-用意してくれたら行くとかって [言って、]
 43K [うん。]
 44K [うん。]
 45F [あー] ん。
 46S hh じゃ分かった。用意するから絶対きてね
 47S とかって [ゆう] こう売り言葉に買い言葉 (.) 的なー、
 48F [うん。]
 49F =うん。うん。
 50S =よーーしみたいな感じになってー、
 51F うん。
 52S で次の日山田さんがー hh あのー東急ハンズまで
 53S い (h) って (hhh) へ [へ hhh]
 54F [ハンズまで] 行ったんだ [一。]
 55S [>そ] う。 <
 56S >買ってきてー、 <
 57 (1.0)
 58F で入ったのね? その服は。

分析対象としてこのストーリーテリングを取り上げた最初の動機は、幸江がなぜ、今、ここでこの物語を語っているかという疑問に答えることであった。幸江は邦子の表した意外さに対応して、物語を語っている。意外さに対応して物語を語るとは、ストーリーテリングの過程の中でどのようにして行われ、どのような意味を持つのであろうか。

次節以下で、まず、幸江の物語「サンタクロースの衣装を買った」を分析し (レベル1)、幸江が他の登場人物との関係の中で自分をどのように位置づけているかを「叔父さん」「本人」という語の使用と「動詞テ形+もらう」の使用に焦点を当てて提示する。次に、物語が始まる会話の状況を分析し (レベル2)、「衣装を買った」ことに対しての意外さという邦子の評価的態度が、「動詞+ちゃう (動詞テ形+しまう) の短縮形」、反復、声の大きさや非言語行動によって会話の連鎖の中で表され、幸江がその評価的態度の対象となっていく、その結

果、幸江が邦子の表した意外さを緩和するために物語を語り始めていることを示す。最後に(レベル3)、物語を語ることによって幸江が普通さという自己を表し、それがどのように表出されているかを提示する。

3.2 レベル1: 物語中での幸江(語り手)の位置づけ

幸江の物語「サンタクロースの衣装を買った」は、出来事の時間の連鎖及び評価的コメントの点から(3)に示す3つの部分(I, II, III)から構成されている。

(3) 物語「サンタクロースの衣装を買った」の構成

- | | |
|----------------------------|---------------|
| I 幸江とケン(弟)との交渉のダイアローグの描写 | 19S ~ 46S |
| II ダイアローグの特徴と幸江の心的状態の描写 | |
| 「売り言葉に買い言葉(.)的なー」 | 47S |
| 「よーしみたいな感じになってー」 | 50S |
| III 出来事: 山田さん(夫)が衣装を買いに行った | 52S, 53S, 56S |

始めに(I)幸江は、ケンのクリスマスパーティーへの参加をめぐる2人の交渉のダイアローグを描いている。交渉は、幸江が子供のためにケンがドロッセルマイヤーおじさん役をすることを望むと(24S, 25S, 27S, 28S)、ケンは幸江がサンタクロースの衣装を用意したらパーティーに参加する(33S, 35S)という条件を出し、幸江はケンの提示した条件を承諾した(46S)というものである。次に(II)、出来事の描写を一時的に止め、ケンとの交渉を「売り言葉に買い言葉(.)的なー」(47S)ものと特徴付けて、ケンが幸江を挑発し、幸江はケンの挑発に応えたという見方を示している。さらに「よーしみたいな感じになってー」(50S)と言って、交渉の結果の自分の心的状態を「よーし」と引用し、「衣装を買う」ことに対して積極的になったことを示している。これらにより、物語の「外付け評価 'external evaluation」(Labov 1972)が行われ、物語のポイントが示唆されている^[註6]。最後に(III)、山田さん(夫)が衣装を買いに行ったという出来事を語って物語を終わらせている。IIで行われた「外付け評価」が表すように、幸江の物語のポイントは、「「衣装を買った」ということがケンとの交渉により動機付けられたものである」と言えよう。

幸江は「衣装を買った」経緯を幸江の子供(正樹)を基点とした「家族」(幸江、ケン、山田)の出来事として語っている。交渉のダイアローグ(I)の序盤で、「hhでも一正樹君にとっては最初のクリスマスだから」(24S)「そうだケン君には(.)あの一叔父さんとしてー、」(25S)「[なん]かドロッセルマイヤーおじさんの役をやって」(27S)「もらわなくっちゃーって話[をしたの。]」(28S)と言っているが、この中で幸江はケンを子供の立場から見た「叔父さん」という立場に位置付けている。Sacks (1972, 1979)とSchegloff (2007)は、「叔父さん」のようなあるカテゴリーの中に属する語を「メンバーシップ・カテゴリー・ターム 'membership category term」と呼び、1人の人物があるカテゴリーの中の語彙で指し示された場合、続いて言及される他の人物にもそのカテゴリーが適用されると指摘している。ケンを「叔父さん」という立場に置くことにより子供を基点とした家族の枠組みが物語の中に導入され、幸江は「母親」という立場に間接的に位置付けられることになる。また、「ドロッセルマイヤーおじさんの役をやってもらわなくっちゃ」(27S, 28S)と言っているが、「動詞テ形+もらう」の形式を用いることにより、ケンがドロッセルマイヤー役を演じることによって恩恵を受けることが示されている。ケンが子供のためにドロッセルマイヤー役をすることによって幸江も恩恵を受けるというように、自分が母親として子供と同じグループに位置することを表していると言える。このように「叔父さん」、「動詞テ形+もらう」を用いることによって、幸江は「母親として子供のためにケンに要求をする者」として物語の中に自分を位置付けている。

次に幸江は「>そしたらくなんか(.)本人は」(30S)「[あじゃあ、もーサンタのー]衣装を[一用]意しておいて」(33S)「くれた[らー]行くよとかってー。」(35S)と言って、「ドロッセルマイヤーおじさんの役をやる」という幸江の要求に対するケンの応答を描写している。この描写の中で、幸江はケンを「本人」と指し示しているが、この場合の「本人」は、「叔父として要求を受けた当事者」というニュアンスが含まれるであろう。ここでは、幸江が自分を「母・要求者(要求する者)」、ケンを「叔父・被要求者(要求される者)」という関係に位置付けていることが表されている。続いて、ケンが幸江の要求を受諾する条件を出したことを語っているが(33S, 35S)、これにより幸江とケンの立場は逆になり、幸江が「母・(自分の要求を満たすための)被要求者」、ケン

が「叔父・(幸江の要求に応えるための) 要求者」という立場になったことが示されている。ダイアログの描写の最後に (46S)、幸江は自分がケンの条件を受け入れたことを示している。

以上の様に子供を基点とした家族の枠の中で自分の立場が母親であることを示唆した上で、自分を「(ケンの参加を求める) 要求者」、「(衣装を要求される) 被要求者」と位置付けることにより、幸江は「サンタクロースの衣装を買った」動機を出来事に対する自分の主体性、或いは積極性という点から伝えている。先ず、母親としてケンがドロッセルマイヤーおじさんの役をすることを要求する主体的な要求者として自分を位置付けている。次に、母親・要求者としてその要求を満たすためにケンの要求に応えるという主体性を維持しながら、一方で衣装を用意することについて被要求者として受身的な立場に自分を置いている。衣装を用意する(衣装を買う)ことについて、ケンに要求された「被要求者」としては消極的だが、ケンのパーティーへの参加を求める「要求者」としては積極的であるというように、それへの関わりにおいて拮抗する立場が見て取れる。衣装を用意する(買う)ことについての消極的態度は、ダイアログの中で幸江がサンタクロースの帽子を提案している (38S) ことによっても描かれている。積極的態度は、ダイアログに続く「外付け評価」(II) の中の「よーし」(50S) という表現に示されている。

物語の最後で幸江は、夫が実際に衣装を買いに行ったことを語っている (52S, 53S, 56S)。このことによって、「衣装を買った」という出来事が幸江だけではなく実際にその行為を行った者として夫も関わったことが示されている。

このような物語を幸江が語るきっかけとなったのは、聞き手である邦子が「衣装を買った」ことに驚きと興味を示したことがきっかけとなっているが、その会話の状況を次節で考察する。

3.3 レベル2: 物語が始まる会話の状況での幸江の位置づけ

物語が始まる直前の会話で、邦子は「サンタクロースの衣装」をめぐって意外さを2度表している。2度の意外さは、その対象に幸江が直接含まれるか否かの点で異なっている。幸江は、その対象に自分が含まれる2度目の邦子の意外さの表出の直後に物語を始めている。

(4) 物語直前の会話 (会話 (1) の部分)

- 11S [hhh でほ] らなんか荷物も担いでるか [らさあ。]
{11S: うなずいてから、両手を肩のほうに動かして荷物を担いでいるジェスチャーをする}
- 12K [え何] 何。
- 13F ハ [ハハハ ハハハ]
- 14K [え、なんか衣装] 着ちゃってた [の?]
{14K: 姿勢を変えて上半身を少し後ろに反らす}
- 15S [衣しよ] う買って [ねえ (h) hhh]
{15S: 「ねえ」で左手で口を覆う}
- 16F [hh ハハハ]
- 17K [買ったのー?]
{17K: Sの方に上半身を乗り出す}
- 18F [ハ ハ ハハハ] ハハ
{18F: Sがうなづく}
- 19S (hh) ってゆうかー、ご飯食べに来なよって [言ったのねえ?]

ケンが「(サンタクロースの) 荷物を担いで」(11S) いたことが明らかにされると、邦子は、「[え何] 何。」(12K) 「[え、なんか衣装] 着ちゃってた [の?]」(14K) と言って、ケンの姿の自分の理解について確認を求めている。邦子の間投詞「え」と文法表現「動詞+ちやう(「動詞テ形+しまう」の短縮形)」の使用は、「ケンが衣装を着ていた」という状態・状況に対して邦子が驚き、意外であるという評価をしていることを表している^[註7]。もう1人の聞き手である文恵は、声高に笑って(13F) 幸江の描写を楽しんでいる。邦子の評価的態度を含んだ確認要求に対して、幸江は「[衣しよ] う買って [ねえ (h) hhh]」(15S) と言って、「衣装を買った」という新たな出来事を明らかにしているが、発話末で笑いをかぶせ、笑いを隠すかのように手で口元を覆っている。発話末にかぶさる幸江の笑いは、幸江がこの出来事を何らかの微笑ましい出来事として捉えていることの表れであるとも考えられる一方、幸江がこの出来事を気恥ずかしい出来事と見なしており、照れ笑いのように気恥ずかしさという評価を曖昧にするために笑っているとも考えられる^[註8]。後者の場合、邦子が「衣装を着ている」こ

とに驚きという評価的態度を示した直後に、それ以上に驚きを誘うかもしれない「衣装を買った」ということを明らかにしている発話末にかぶさる笑いであることから、幸江は「買った」ことを明らかにしているもの、それを言うのは気恥ずかしいという姿勢を示すものと考えられる。

「衣装を買った」ことが明らかにされると、邦子は上半身を幸江の方に傾けながら大きな声で幸江の用いた語を反復し「**買ったのー？**」(17K)と言って、「衣装を買った」ことの確認要求をしている。大きな声と大きく延ばされた上昇イントネーション、また上半身の動きは、邦子が「衣装を買った」ことに大変驚いていることを表す^[註9]。幸江は、邦子の確認要求にうなずいて応答し、その直後に「ってゆうかー」と前置きをして物語を開始している。幸江の「ってゆうかー」は、続く発話では直前に提出された発話内容或いはその発話から解釈される事柄と差し替える事柄を話すという幸江の姿勢を示すものであると言えよう^[註10]。

邦子が2度表した驚き・意外さと言う評価態度は、その評価の対象の性質が状況か出来事かの点で異なり、評価される状況、出来事に関わる幸江の立場が異なっている。「衣装着ちゃった」(14K)では、「ケンが衣装を着ていた」という状況に向けられており、「着た」行為者がケンであるため、幸江が邦子の評価態度の直接対象とはなりにくい。邦子の評価に対し、幸江は「衣装を買った」という新しい情報を提出し、笑いによってその姿勢を曖昧にしている。一方、「衣装を買った」ことについての評価的態度(17K)は、「買った」という行為者を含む出来事に向けられたものである。幸江の発話または文脈の中で行為者は限定されていないが、限定されていない故に邦子の驚きが可能な行為者として幸江に向けられていると聞こえるものであり、幸江は邦子の評価の対象という立場に置かれることになる。驚き、意外さといった邦子の評価的態度が「衣装を買った」可能な行為者として幸江に向けられた直後に、幸江が「ってゆうかー」と前置きし、物語「サンタクロースの衣装を買った」を開始していることから、物語は「衣装を買った」ことに釈明を加え、邦子により投げかけられた自分に対する意外さを緩和するために開始されたと解釈できる。

3.4 レベル3：幸江の「普通さ」の表出

前節で述べたように、幸江は邦子により投げかけられた「意外さ」という評価に対して、自分の「普通さ」を示すことにより邦子の評価を緩和するために、物語を語っている。幸江の普通さという自己は、自分を母親の立場に置くこと、ケンの要求に対する被要求者として受身的立場におくこと、「衣装を買った」に関わる他の人物に責任を分散させることによって表されている。

前節で示したように幸江は発話にかぶさる笑いによって「衣装を買った」ことに気恥ずかしさとも言える姿勢を示している。また、物語の中でケンに帽子を提案した(38S)と語っていることにより、幸江自身も「衣装を買う」ことが普通だとは評価していないことが分かる。物語開始以前では、「衣装を買った」ことは具体的な状況、文脈の中では語られておらず、一般的に「衣装を買う」ことが普通ではないという理解が参加者の間にあると考えられる。

幸江は、文脈外では普通ではないと見なされる事柄を子供を基点とした家族の文脈に入れて文脈化し、自分を母親の立場に位置付けることにより、一連の自分の発言や行動を「非例外的な」(Sacks 1992)なものとして描いて自分の普通さを表している。自分を母親という立場に位置付けることにより、「母親は子供の喜びのために物事を行う」というディスコースの中では、子供のための主体的な要求者になるということが例外的なことではなくなり、母親ならそうするかもしれないという解釈を聞き手に与える。このため、ケンにパーティーに参加して欲しい、ケンにドロセルマイヤー役をやって欲しいという非例外的な「主体的な母親・要求者」として、ケンの要求(「衣装を用意する」)を承諾することも仕方がないこととなる。結果、「衣装を買った」ことが驚くべき出来事ではないかのように描かれ、母親としての普通さが表出される。

また、幸江は自分をケンの要求に対する被要求者として受身的立場に置き、「衣装を買う」という提案が自分の主体的な提案ではないことを示している。物語の最後で「山田さん(夫)」が実際に衣装を買いに行ったことを語ることにより、「衣装を買った」という行為の当事者が自分ではないことを示している。このように、家族の文脈に入れて物語として出来事を語ることにより、幸江は出来事に関わる複数のうちの1人と位置付けられ、出来事の責任が分散さ

れ、自分に対する意外さが緩和されることになる。

以上のように、「衣装を買った」ことに対して表された邦子の驚き、意外さという評価的態度に対して、幸江はこの出来事を家族という文脈に入れて、ケンとの主体的・受身的な関係の中で自分を母親という立場に位置付けることにより普通さという自己の立場を表出している。同時に、物語として経緯の細部を描き複数の登場人物を描くことによって、意外さへの責任を分散させることができている。幸江は、「衣装を買う」ことが普通ではないという見方を曖昧に示唆しながら、邦子が示した意外さから自分の普通さを守るために物語を語ったと解釈されるが、この「衣装を買う」普通さをめぐり、主体的・受身的、積極的・消極的という態度の中に「規範的ディスコースに合わせようとする自己或いは反抗する自己」(Bamberg 2006: 145) という2通りの自己を見て取ることができる。

4 終わりに

本研究では、ストーリーテリング「サンタクロースの衣装を買った」をポジショニング・アプローチを用いて分析し、幸江の自己の位置付けを普通さ、主体的・受身的自己という点から考察した。レベル1の分析では、物語の構造及び、語彙「叔父さん」、「本人」、文法表現「動詞テ形+もらう」に焦点を当てて考察することにより、幸江が子供の母親、要求者、被要求者として位置付けられること、また、幸江の主体的・受身的自己が物語の中に位置付けられることを示した。レベル2の分析では物語が始まる会話の状況进行分析し、発話連鎖の中で邦子の用いる文法表現「動詞+ちゅう（「動詞テ形+しまう」の短縮形）、反復、非言語行動、音声特徴（大きな声）が邦子の2度の驚き、意外さといった評価態度の表出に関与していることを示した。2度の意外さの表出に対し、幸江が対応する姿勢を変化させていることを示した。さらに、レベル3の分析では、「非例外的な」ものとして普通ではないことを描くことにより「普通さ」を表出するというSacksの考えを用いて、邦子の意外さに対抗して表出された幸江の普通さという自己に解釈を加えた。

会話の中で語られる物語は、それが話される会話の状況や参加者を取り巻く

社会的状況に従って、語り手が特定の語彙や表現を選択し物語を構成するのであり、物語はあらかじめ出来上がっているものではない (Sacks 1992: 15)。したがって、「サンタクロースの衣装を買った」で用いられる語彙や表現が他のストーリーテリングで同じように自己の表出に用いられるとは限らない。本研究では、ポジショニング・アプローチを用いてストーリーテリングの過程を通して参加者の自己表出を考察することにより、話し手の評価態度を表す語彙や文法表現、また、「叔父さん」のように何らかのカテゴリの中で話し手の立場を表す語彙が自己表出を分析する上で重要な手がかりとなりうることを示した。多くの会話事例を分析し自己表出、普通さの表出に関わる文脈や語彙、表現を含む手段を抽出することを今後の課題とする。

〈アリゾナ大学〉

【会話トランスクリプトの記号】

- { } 身振りや体の動き、その他物理的状況の説明
- [] 発話の重なりが始まる・終わる時点
- = 異なる話者の直前の発話に続いて途切れなく発話が始まることを示す
- (.) 非常に短い間合い
- () 聞き取り不可能な箇所
- (そう) 聞き取りが確定できない発話
- (h) 発話にかぶさる笑い
- hhh 呼気音
- hhh 吸気音
- 最後の母音が伸ばされていることを示す
- 。 下降イントネーション
- ? 上昇イントネーション
- 、 発話が途切れずに次に続くイントネーション
- >< 前後に比べて小さい声で話している箇所
- 太字 前後に比べて大きい声で話している箇所

注

- [注1] …… 以下、外国語文献の日本語訳はすべて筆者によるものである。
- [注2] …… 物語のタイトルは、筆者が便宜上付けたものである。個人的物語とは、他の参加者と共有していない語り手の個人的経験についての物語である。

- [注3] …… Lawrence (1996: 182) は、インタビューを受けている娼婦が、自分の仕事の平凡で普通な側面をニュース性のあるものとして前景化し、汚名を被っている事柄を背景化するように語ることによって、自分の職業を正当化しているとしている。このことが場所の描き方や話題のシフト、インタビュアーとの間のターン交換により可能になっていることを提示している。Johnson & Paoletti (2004) は、インタビューにより抽出された語り手の結婚にまつわる物語を分析し、語り手が「平凡だが特別な ‘ordinary but special’」自己を表出しているとしている。語り手が話題を操作したり、自分と他者とを対比したりすることにより、このような自己表出が行われている。
- [注4] …… 参加者の名前は偽名である。論文末の「会話トランスクリプトの記号」に、会話のトランスクリプトで用いた記号の説明を記した。
- [注5] …… 「ドロッセルマイヤーおじさん」とは、バレエ「くるみ割り人形」に登場する人物である。
- [注6] …… Labov (1972) によると、物語の語り手は物語の途中で何が起こったかという出来事を語るのを止めて、物語に評価的なコメントを加えたり、その時語り手がどのような気持ちであったかを引用したりして、物語のポイントを作り上げるという。Labovは、このような語り手の方略を「外付け評価 ‘external evaluation’」と呼んでいる。
- [注7] …… 「動詞テ形+しまう」は、出来事に対する意外さや後悔という話者の心理状態を表したり（寺村1986: 152-153）、話者の「否定的評価 ‘negative evaluation’」のような「評価」を表しうる（Iwasaki 2002: 286-287）。
- [注8] …… 早川（1997）は、「照れ笑い」のように発話内容におかしさが含まれていない場合の笑いは、気恥ずかしさを隠したり緩和するために行われるとしている。Ikeda (2003) は、話者自身についてのデリケートな情報が含まれる発話に笑いがかぶさることがあるとし、このような笑いは発話末や発話の直後に見られるとしている。
- [注9] …… 上昇イントネーションによる反復は、反復される事柄について確認を要求することがその発話の機能であるが、文脈によっては話者の感情や態度を表すとされる（Kumagai 2004）。
- [注10] …… 会話インターアクションの中でターンの冒頭で用いられる「(っ) てゆうか」は、話者自身の前出或いは直前の発話を修復する時、相手の前出或いは直前の発話を修復する時、相手の発話に不同意を示す時、それまでと異なる新しい話題や活動（activity）を導入する時に用いられる（Tanaka 2001, 若松・細田 2003, Rosenthal 2008, 福原 2008）。

参考文献

- 寺村秀夫 (1986) 『日本語のシンタクスと意味II』 ころしお出版
 早川治子 (1997) 「笑いの意図と談話展開機能」 現代日本語研究会 (編) 『女性のことば・職場編』 pp.175-196. ひつじ書房

- 福原裕一 (2008) 「「ていうか」のメタ言語的修正—若年層の使用例を中心に」 『社会言語科学会第22回大会発表論文集』 pp.148-151.
 若松美記子・細田由利 (2003) 「相互行為・文法・予測可能性—「てゆうか」の分析を例にして」 『語用論研究』 5, pp.31-43. 日本語用論学会
 Bamberg, M. (1997) Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7 (1-4), pp.335-342.
 Bamberg, M. (2004) Form and functions of ‘Slut Bashing’ in male identity constructions in 15-year-olds. *Human Development*, 47, pp.331-353.
 Bamberg, M. (2006) Stories: Big or small. *Narrative Inquiry*, 16(1), pp.139-147.
 Bamberg, M., & Georgakopoulou, A. (2008) Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk*, 28(3), pp.377-396.
 Bamberg, M., De Fina, A., & Schiffrin, D. (2007) Introduction to the volume. In M. Bamberg, A. De Fina, & D. Schiffrin (Eds.), *Selves and Identities in Narrative and Discourse* (pp.1-8). Philadelphia: John Benjamins.
 Becker, T., & Quasthoff, M. (2004) Introduction: Different dimensions in the field of narrative interaction. In M. Quasthoff, & T. Becker (Eds.), *Narrative Interaction* (pp.1-11). Philadelphia: John Benjamins.
 Davies, B., & Harré, R. (1990) Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20 (1), pp.43-63.
 Ikeda, T. (2003) The organization and functions of laughter in a Japanese face-to-face interaction. *The Japanese Journal of Language in Society*, 6 (1), pp.52-60.
 Iwasaki, S. (2002) *Japanese*. Philadelphia: John Benjamins.
 Jefferson, G. (1978) Sequential aspects of story telling in conversation. In J. Schenkin (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction* (pp.219-248). New York: Academic Press.
 Johnson, G., & Paoletti, I. (2004) Orienting to the category “ordinary – but special” in an Australian-Italian courtship and marriage narrative. *Narrative Inquiry*, 14 (1), pp.191-218.
 Karatsu, M. (2004) *A Study of Storytelling in Japanese Conversation*. (Doctoral dissertation, University of Minnesota, Minneapolis, MM, USA)
 Karatsu, M. (2010) Sharing a personal discovery of a taste: Using distal demonstratives in a storytelling about kakuni ‘stewed pork belly.’ In P. Szatrowski (Ed.), *Storytelling Across Japanese Conversational Genre* (pp.113-143). Philadelphia: John Benjamins.
 Kumagai, T. (2004) The role of repetition in complaint conversations. In P. Szatrowski (Ed.), *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction* (pp.199-220). Tokyo: Kurosio Publishers.
 Labov, W. (1972) The transformation of experience in narrative syntax. In W. Labov (Ed.), *Language in the Inner City: Studies in the black English vernacular* (pp.183-259). Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
 Lawrence, S. (1996) Normalizing stigmatized practices: Achieving co-membership by “doing being ordinary.” *Research on Language and Social Interaction*, 29 (3), pp.181-218.
 Rosenthal, B. (2008) A resource for repair in Japanese talk-in-interaction: The phrase TTE YUU KA. *Research on Language and Social Interaction*, 41 (2), pp.227-240.

- Sacks, H. (1972) On the analyzability of stories by children. In J. Gumperz, & D. Hymes (Eds.), *Directions in Sociolinguistics* (pp.325–345). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Sacks, H. (1979) Hotrodder: A revolutionary category. In G. Psathas (Ed.), *Everyday Language – Studies in Ethnomethodology* (pp.7–14). New York: Irvington.
- Sacks, H. (1984) On doing “being ordinary.” In J. M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action* (pp.413–429). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1992) *Lecture on Conversation* (G. Jefferson, Ed.). Cambridge: Blackwell Publishers.
- Schegloff, E. (2007) A tutorial on membership categorization. *Journal of Pragmatics*, 39, pp.426–482.
- Szatrowski, P. (2010) Introduction: Storytelling across Japanese conversational genre. In P. Szatrowski (Ed.), *Storytelling Across Japanese Conversational Genre* (pp.3–22). Philadelphia: John Benjamins.
- Tanaka, H. (2001) The implementation of possible cognitive shifts in Japanese conversation. In M. Selting (Ed.), *Studies in Interactional Linguistics* (pp.81–109). Philadelphia: John Benjamins.
- Wortham, S. (2000) Interactional positioning and narrative self-construction. *Narrative Inquiry*, 10 (1), pp.157–184.